

廃校となりし校庭のグラウンドに忘れられたるボールが一つ

(R)

植物の神秘 ●●●

夏至の頃は、五月に田植えした苗も伸びて、温かくなり、稲の株の分けつが盛んな時期。一本の苗は五本程に茎が分かれ(分けつ)します。一粒の籾から発芽した苗は秋に実を結び、ひとつの穂が七十粒の実を結ぶとすると、全部で三百五十個の米粒ができる計算です。こんなに増える米粒の数に驚きます。そして分けつがこんなにすすむのは、一年で一番日太陽の照らす時間の長い夏至の時期だからでしょうか。この時期、生物の成長は目を見張るものがあります。

山形では、「紅花、半夏一つ咲き」という言葉があります。半夏になると、広い紅花畑の中でたった一輪の紅花がポツンと咲き、それを合図に翌日から次々と花を咲かせる神秘的な咲き方のことです。

この辺りでは、水神様の信仰からか、初なりの胡瓜を河童に供えたり、川へ流して川の無事故を願ったりします。また、初なりの物は神様や仏様に供えてから頂きます。「初物を食べたなら、東の方角を向いて笑うと七十五日長生きする」という言い伝えもあります。

ここの盆地は、「夏は日中暑く夜はひんやりとし、冬は雪深く春の訪れは遅い気候」ではありますが、それだけに湧水わきみずが集まり、ここだからこそおいしい産物が出来るのでしょう。自然の力を借りて作物を作る人々は、我慢強く、感謝の気持ちを持ち続けています。●●●

乃東枯る(なつかれくさかれる)

6月21日～6月25日頃

毎年この時期に届くサクランボは、子供たちに大人気でした。ご近所にも分けてみなさんに喜ばれたものです。中でも娘が沖縄の離島に赴任していた時とはとびきり喜ばれました。島の人達は、生まれて初めて食べる憧れの果実だったので、「これが山形のサクランボ～！」と感激して食べてくれたといいます。(れ)

菖蒲華さく(あやめはなさく)

6月26日～6月30日頃

母が逝った年の夏の或夜、遠く青田から近づいて来て吾身に纏わるように舞う蛍一つ。両掌で掬える程の近さなれど、私はその場を立ち去った。この蛍は妣(母)の化身だと直感したから。後日「あの時の蛍は婆さんだったかもね。」との私に「んだねや、ずっと母さんの背中に廻って」と娘も合槌を打つ。忘れえぬあの時の妣蛍よ。(熊谷ヨエ子)

半夏生ず(はんげしょうず)

7月1日～7月6日頃

縦八寸、横一尺余りの箱を作り底に板ガラスをはめる。それは「ガラス箱」と呼ぶ漁具である。ガラス箱を川に浸すと川底がくっきりと見える。鰻(カジカ)は平たい石の下に隠れている。石をソーツと退かすと鰻が流れに身を委ねている。狙いを定めて簞(やす)を突き刺す。鰻は煮るより焼くのが旨い。(海藤忠男)



2015.6.15 こけこっこー花(タチアオイ)

読書会だより②②

大石田七十二候読書会・大石田町立図書館

大石田の夏至のころ

七十二候より

夏至の日、実家へ遅い苺を摘みに出かけたら、からすびしゃくがあちこちで頭をもたげていました。ジージーと蝉の声。熟れ過ぎた苺の汁を手につけ、夕暮れの太陽と競争し、欲と二人連れで収穫してきました。日も暮れて、辺りは真っ暗。野性味ある甘酸っぱい苺は美味しいけれど、生では食べきれず、ジャムにするなど後始末がまた一仕事でした。